

# 祭祀関係史料に見る神社の近代化とその影響について

——草津市志那吉田の「社号改称願」から——

橋 本 章

## 一 「近代」をみつめる視点

「近代」という言葉が、学術的には単に時代区分を示すもののみではなく、かつてから久しい。近代とは、社会集団が国家のレベルにまで拡大され、民は「国民」として国家のもとに統轄された時代、つまり、政治・経済・社会などあらゆる分野が国家的意思の下で左右される時代が「近代」と認識され、現在に至っている。世界は近代と前近代によってそのありようを大きく様変わりさせたのである。故にその狭間で現象として起こった「近代化」という事態は、我々の社会を理解し、かつ大きな意味での歴史の変遷を理解する上で重要な研究課題と位置付けられるようになった。

ところで、近代化の流れと「民俗」の発見とは、軌を同じく

するとの見解が近年示されつつある。例えば岩竹美加子は「民俗学は近代化や外国の支配、外来文化に対する反発として出発しており、文化は民族的、国家的単位で表現されるという思想に基づいて、民俗の中に近代や外来文化によって失われつつあると知覚される、民族や国家の文化の原形や基層を「発見」し、また、独自の民族性や国民性を作り出そうとした」と述べて、近代国家が創造されてゆく過程においては、伝統的社会が近代国家へと昇華したことを示す物語、つまり伝統や民俗をその身に帯びる必要のあったことを指摘する。そして、近代と民俗の關係性について、岩竹は次のような見解を示す。

民俗は人里離れた農村や山村にかつて存在していたが、近代によって崩壊させられたのではない。民俗は、近代的経

験と対置して捉えられた社会のある部分を民俗として見るまなざしの中に構築されたのである。昔話や伝説、通過儀礼やその他の慣習は確かに存在したとしても、それらを民俗を代表するものとして選択し、固定すること、さらにそこに「日本」の文化の基層や原形があるとすることは、社会的、歴史的な構築である<sup>(2)</sup>。

岩竹は、民俗学的思考が、近代化によって民俗が破壊されてしまうという焦燥感にせきたてられ、前近代の社会の諸現象を「民俗」という枠組みに挿入し、それが結果として近代国家と国家意識形成の手助けをし、また「近代化を目指す社会における政治的目的を支えてきた」として、民俗や伝統と近代とを一種の「共犯関係」と捉えている。

しかしながら、岩竹は「近代」と「民俗」とを相関関係の中でのみ論じているため、それぞれがどのように規定されているのかについても少し踏み込んだ説明を求めたくもあるのだが、民俗の出自が近代化の過程にあるという認識については一定の理解を示したいと思う。

そこで問題とされるべきは、近代化と国家意識形成の流れの中で、「民俗」の認識されてゆく素地が実際にどのように構築されていったのかという点と、民俗を発見することと対置され

るであろう民衆による近代化の受容について、それが如何なるプロセスをもって成し遂げられていったのかという点の二つについてであろう。

これに関して米地實は、「近代国家の生成過程において、一般民衆がどのようにして国家への帰属意識を昂めたかを理解するために、彼らは自己の生活組織と国家とをどのような意識をもって結びつけていたのかを知ることが必要である」との課題を設定し、その解の見通しについて、民衆側のスタンスの中に「明治の近代的統一国家の権威を受け入れる社会構造が基底に存在していたというように考えたい<sup>(3)</sup>」とも述べている。米地のいう「国家の権威を受け入れる社会構造」とは、村落などの共同体に暮らす人々が集いて祭祀を執り行い、時にその政治的衆議一決の場となり、他村との差異を明瞭にする象徴ともなったであろう鎮守、すなわち神社と、これをめぐる諸事象を指す。筆者もこの神社祭祀にその眼差しを向けることによって、民衆側の近代化の一端が検証できるものと考えている。

そこで本論では、日本における近代化の前後において、社会に著しい影響を及ぼした神社祭祀への動きを中心に、その様相をみてゆくこととする。

## 二 神仏分離から神社合祀まで

「民俗」をその研究素材におく民俗学は、神社を機軸とする祭礼行事についての研究をこれまで数多く積み重ねてきた。にもかかわらず、比較的直近の過去に起こった重大な事象である神社合祀については、これまであまり言及してこなかった。

民俗学は、ともすればそのまなざしを古代にまで遡及させて眼前の事象を理解しようとし、その結果、そこにある意味の「幸福な民俗世界」を形成してきた。しかしその根幹のひとつに位置する神社は、合祀という一大施策によってその姿を人工的に変飾させられたのであり、我々が目にする神社を中心とした祭祀は、おしなべてその施策の嵐をくぐり抜けてきた姿であるということとは、しっかりと認識しておく必要があるだろう。

後にも述べるが、神社合祀は結果として失敗し、合祀を免れたり、あるいは元の形に復したりして現在に至る神社も数多い。しかし、そうした現象のみをとらまえて、民俗として成立した祭祀体系の力を認め、逆に人の行為である合祀施策の強制を過小評価するきらいが、民俗学を中心とする事例研究には従前見受けられたようにも思われる。つまり「古来の神々は急激な近代化の波を受けてもなお滅びず」といった思考である。

この点について安丸良夫は、近代化による民俗への影響につ

いて、廃仏毀釈運動を例に次のように述べている。

結果からみると、この廃仏毀釈は、寺院仏教をほぼ完全に絶滅したが、民俗信仰を絶滅することはできなかったし、民俗信仰と結びついていたさまざまな行事や芸能なども、やがて復古し伝承された。しかし、この後者の側面を強調して、廃仏毀釈は民衆の信仰のもっとも基底的な部分を変え、るほどに強力なものではなかったかのようにいうなら、それはおそらく民俗の表相にとられすぎた見方であろう。民俗的なもののある側面が継承されたり復活されたりしても、権力による地域の信仰体系の破壊のあとでは、それが全体としての精神生活においてもつ意味は、大きく変容しているはずだからである。

安丸は、明治初期に行われた神仏分離や廃仏毀釈が、その後の人々の精神に大きな変革をもたらしたと指摘するが、これについては賛意を示す見解がその後多く出される。そして廃仏運動は、寺院勢力の減退を狙う神道側からの働きかけに起因するとされるが、この取組みの趨勢は、結果として神社や神道への刃ともなっている。

ではここで、明治維新以降の宗教施策について簡略にまとめ

年号	西暦	月 日	事 項
明治元年	1868	3月13日	祭政一致の布告
明治元年	1868	3月28日	神仏習合の実態を改める布告
明治元年	1868	閏4月21日	神祇官設置
明治元年	1868	12月20日	神社調べに関する達
明治2年	1869	7月8日	官制改革により神祇官が太政官の上に置かれる
明治3年	1870	閏10月28日	大小神社取調の布告
明治4年	1871	5月14日	太政官布告 官社以下順序定額
明治4年	1871	7月4日	太政官布告第321号 郷社定則
明治4年	1871	8月8日	神祇官を神祇省に改称し、太政官の下に置かれる
明治5年	1872	1月	神祇省布達第一号 村社取調方の布達
明治5年	1872	2月	太政官布告58号 神官社掌官禄の民費課出
明治6年	1873	2月22日	太政官布告 郷村社祠官祠掌給料民費課出廃止
明治6年	1873	3月	神祇省が廃止され、代わり教部省が設置される。
明治6年	1873	7月31日	太政官布告 府県神社官月給廃止
明治6年	1873	12月25日	布告 神社列格については中央政府がこれを掌る
明治7年	1874	11月10日	太政官布告375号により内務省が設置される
明治10年	1877	――	教部省が廃止され、寺社行政は内務省に移管される
明治11年	1878	9月9日	内務省乙第57号達府県社寺取扱概則
明治12年	1879	6月28日	内務省乙第31号府県宛 神社明細帳の様式が整備される
明治12年	1879	12月11日	太政官達 神職等級の廃止
明治39年	1906	4月2日	府県社以下神社神饌幣帛料供進に関する勅令96号
明治39年	1906	8月9日	神社寺院仏堂合併跡地の譲与に関する勅令230号
明治41年	1908	10月31日	戊申詔書が煥発される

表1 明治期における神社整理関連年表

ておこう。新政府は、明治元年（一八六八）三月十三日の祭政一致の布告によって、以後の国家体制の宗教と政治に関する方針を示し、これに「天下之諸神社、神主、禰宜、祝、神部ニ至迄被向後右神祇官附屬ニ被 仰渡候」との一文を明記する。この布告によって新政府は、諸国の神社の実態を把握する必要に迫られ、直後の同月二十八日の布告と同年十二月二十日の達<sup>（7）</sup>のそれぞれにおいて、神仏分離の遂行と共に各地の神社の実情を調査するよう命じている。これら二つの布告や達は、廃仏毀釈運動が全国へ波及する呼び水となったとも捉えられている。その後、急激な廃仏運動はこれを是正されるのだが、神社調査についてはその後も継続的おこなわれたよう<sup>（8）</sup>で、明治三年（一八七〇）閏十月二十八日には大小神社取調べに関する布告が出されている。

そして国家による祭祀の制度は、当時まだ太政官の上に位置していた神祇官を中心に整備されてゆき、明治四年（一八七一）五月十四日に出された「神官ノ世襲廃止ニ関スル件」の太政官布告では、「神社ノ儀ハ国家ノ宗祀ニテ一人一家ノ私有ニスヘキニ非サルハ勿論ノ事ニ候」との一文が添えられ、神社

で執り行われる祭祀が「国家ノ宗祀」であるとの位置付けが示されるに至る。<sup>(9)</sup>これによって神職は官吏となり、同年同月には「官社以下定額及神官職員規則」が定められ、官將社・國幣社、および府社、藩社、県社、府藩県縣敬ノ社、郷社、郷邑産土神などの列格基準が示された。<sup>(10)</sup>また同年七月の太政官布告では、郷社定則として「郷社ハ凡戸籍区一区ニ一社」と定め、その附属として村社を置くことが定められ、ここに「国家ノ宗祀」としての神社の体系が整えられた。

ところが、明治四年（一八七二）八月八日の神祇官の神祇省への降格、明治六年（一八七三）二月二十二日の太政官布告による郷村社祠官祠掌給料の民費課出廃止と、同年三月の神祇省廃止、そして同年七月三十一日太政官布告の府県神社官月給廃止と、神社神道に関する諸々が中央権力から退潮してゆく事態が続く。この事について大濱徹也は、『大隈伯爵日譚』の大隈重信の「其革命の潮勢に乗じて神道を完全に宗教たらしむるを得ざりし」との批判を引用して、神道はその脆弱さ故に「文明開化に対応しうる理論を形成し得」なかったがため、政府における必要性を失っていったとの見解を述べている。<sup>(11)</sup>

その後、神社に関する施策を取り扱う部署は教務省へ移され、さらに内務省の一局へと移管されてゆくのだが、その一方で神社取調に関する動きは継承され、明治十二年（一八七九）六月

二十八日の内務省乙第三一号府県宛によって神社明細帳の様式が整備され、国家による神社統制の制度がようやく揃うことになる。<sup>(12)</sup>

しかしその後、日清日露の両戦争を経た後の明治三十九年（一九〇六）には、四月二日に「府県社以下神社神饌幣帛料供進に関する勅令九六号」が、そして八月九日には「神社寺院仏堂合併跡地の譲与に関する勅令二三〇号」が出される。これら二つの勅令には、神社神饌幣帛料を供進するに足る規模と由緒を有する神社を特定し、それ以外の諸社祠を整理統合すると共に、その整理された社祠跡地譲与に関する規制を緩和して、神社の合祀をより容易にすることが目的化されていた。ここに、全国各地での争論を巻き起こす神社合祀政策の推進が図られることとなるのである。

この明治末年の神社合祀隆盛について森岡清美は、神職に対する公費支出の廃止によって失われた神社の公的性格を回復するため、神社界がその悲願として、公費支出の復活と「国家の宗祀たるの名実を明らかにすること」を達成すべく運動を展開した成果であるとし、一方で「かように神社が国家の宗祀たるの実を充実させてきたことは、日露戦争の戦勝により国民一般に敬神の念慮が深まった世相を反映するものということができ」<sup>(13)</sup>との見解を述べている。

これに関して喜多村理子は、森岡の見解を是としつつも、日露戦争後の財政状況と国家経営の様態にも着目して、「日露戦争の勝利は、これから日本が帝國主義諸列強の一員として出発することを意味」しており、日本が欧米列強と対等の国力をつける必要性から、より強力な国家体制の確立が求められた点と、日露戦後の財政悪化を救済する手段として、特に地方の財源を確保するために、「鎮守の森」をもつ神社周辺の林野を整理して町村の基本財産とする計画が進行していた点とを指摘する<sup>(14)</sup>。

こうして開始された神社合祀は、明治末期から昭和初期にかけて全国で様々な物議をかもし出した。各地で合祀反対爭議が持ち上がる一方で、数々の社祠が統合され境内地が消失していった。合祀施策の推進は各府県の知事・県令の性格に左右されるところが大きかったようであるが、例えば合祀激甚県として知られる三重県では、明治三十八年（一九〇五）には一〇四一三もの神社があったものが、六年後の明治四十四年（一九一〇）には十分の一ちかい一二七一にまで激減されている<sup>(15)</sup>。

この明治末年における神社合祀に対する評価については、例えば鹿野政直の次のような言説が一般的に用いられる。

神社統廃合政策は、人びとの生産や労働とむすびついた信仰を破壊し、人びとがそれに心をかたむける場をなくし、

国家の栄光に直結する信仰を導入しようとした政策であつて（中略）国民の生活を根底から再編成し、国家目的のもとに統一しようとする国民組織化の一環をなしていた<sup>(16)</sup>。

また、安丸良夫は、廃仏毀釈から神社合祀に至る一連の宗教政策を「復古という幻想を伴っていたとはいへ、民衆の精神生活の実態からみれば、なんらの復古でも伝統的なものでもなく、民衆の精神生活への尊大な無理解のうえに強行された、あらたな宗教体系の強制であつた」と位置付ける<sup>(17)</sup>。ただ、ここで問題となるのは、神社合祀という形で国家体制の中に組み込まれてゆく地域の祭祀や、これを執り行う人々が、この現象をどのように理解し、受け入れていったかということについてが、明示されていないという点である。

これまで見てきた通り、明治期の神社に関する宗教政策は、全体としては「国家ノ宗祀」の体系を完成させるために立案され、国民的規模での意識統合を試みてきたものと規定できよう。しかしながら、それらにはそれぞれ段階があり、その流れは次の四つの過程に大まかに分けられるものと筆者は現在考えている。

① 廃仏毀釈に象徴される、神社勢力による仏教勢力の打倒

と「復古」の確立期 (明治元年から明治三年頃まで)

② 神社社格の制定と神社取調の推進期

(明治三年頃から明治五年頃まで)

③ 神社取調の進捗と中央官庁における神祇制度の退潮期

(明治中期頃まで)

④ 神社合祀政策推進期 (明治三〇年代末期以降)

このうち第四期については、先に述べた喜多村の指摘にもある通り、日清日露の両戦争での「戦勝」を受けて、国威発揚がいや増した時期でもあり、また逼迫する財政状況を改善する必要性があったことなどを考慮すると、この時期の神社政策の背景には、前の三時期とはやや様相を異にする状況のあったことが想定される。つまり「戦争」という要因は、対内的には人々を「国民」として統合してゆく方途に大きく寄与したと考えられる。

また、これに関して安丸良夫は、「明治三〇五年ごろの段階で一村一社の氏神制が確立したのではなく、一村二社以上の氏神やさまざまな小祠などが残されるばあいも多く、神社整理が明治末年に地方の大問題になったことも、よく知られている。しかし、神社数がいっきに減少し、一村一社の氏神へと転換・整理された最大の画期は、この時期にあった」と述べ、後の神

社合祀の展開までを見据える上でも、筆者の仮定する第一期および第二期の頃の様相を検討することは有益であると指摘する。

以上、明治期の神社施策の展開について、主に中央官庁側の思考方向をトレースするかたちでその分析を試みた。この上必要となるのは、こうした政策の影響を受け止める側、つまり祭祀に参加してこれを行う人々の様態についての検証であろう。ここで筆者が検討を試みたいと考える課題は、「国家ノ宗祀」としての枠に組み込まれてゆく地元の「神様」に対して、人々がどのような感情を持って接していったかという事と、「氏子」として編成されてゆく際に、人々がそれをどのように受け止めたのかという事。そして、こうした神社合祀に至る一連の動きが、結果として如何なる「民俗」を生み出し、それが現在我々がみる「民俗」に、どのような影響を及ぼしてきたのかという問題についてである。

そこで、以下本論では、安丸の言う「最大の画期」にあたる幕末維新直後の在地の様相の一端を、祭祀関係文書の内容と、その後現在まで「伝承」されている神社を中心とした祭祀行事の様相とを事例として検討することによって、国民として、氏子として人々を統合しようと志向する諸政策に対する、民衆側の対応の様子を明らかにしてゆこうと思う。

### 三 事例の検討―滋賀県草津市志那の祭祀から―

神社合祀政策の推進によって最も著しい影響が出たのは、それまで各々の神社で執り行われてきた祭祀が、その範囲を変えて実施されるか、もしくは新たな地域の枠組みによって再編成されてしまったということではあるまいか。合祀によって自らの鎮守を喪失した村は、同時に村落組織の精神的紐帯を失ってしまったという分析は、これまでよく提示されてきたが、祭祀圏の変化は、祭祀を行ってきた人々にとって、従前よりの行動規範を根底から変更させられる事態を招くものであり、その意味においてより実際的な問題であったものと推察される。

日本各地の祭祀行事の中には、村落単位はもとより、郷や荘という比較的広域な範囲で執り行われてきたものも少なくなかった。山路興造は、古代・中世の社会において荘園体制が確立し維持されてゆく過程で、荘園領主たる権門寺社が支配する荘園に鎮守社を創建し、ここに歛農等の目的で都の芸能や祭祀を移植していった事を指摘している。<sup>19)</sup> こうした見解は、祭祀芸能伝播のプロセスを分析する上での重要な指標となっており、現状で目視できる郷荘レベルの祭祀についても、古代中世の荘園祭祀の系譜をひくものとの分析が堅持される。しかし一方で、明治期以降の神社合祀の基準となった社格の認定は、それぞれ

の社の持つ歴史性や伝承性が重視されたため、合祀範囲の枠組みそのものが、郷荘単位の鎮守社に収斂されてゆく例が必然的に多くなっていったこともまた事実である。

そこで本論では、近世期を通じて荘単位の結合を維持し、祭祀を執り行ってきた滋賀県草津市志那の様相を事例として、それが近代化の過程でどのように変化していったのかを取り上げて検証してみたいと思う。

志那の村々は、草津市北西の琵琶湖岸沿いに位置しており、現在では志那町と志那中町の二つの単位からなっている。このうち志那町では、その内部でさらに二つの自治会組織に分かれており、西の湖岸に近い側が志那、東のやや内陸側が吉田と呼ばれている。祭祀行事については、地域で最も盛大に執り行われる春祭りが三村同日におこなわれており、それぞれが「さんやれ」と呼ばれる全く同質の踊りを奉納する点も同じである。<sup>20)</sup> しかし、祭祀の中心となる神社については、志那は志那神社、吉田は三大神社、志那中は惣社神社とそれぞれ別個に祀られている。

さて、現在の草津市志那町と志那中町とは、かつて志那（品）荘と呼称された地域に比定されており、中世後期には惣村化によって結集した自治組織を維持していた。志那の惣については、明応六年（一四六七）十一月五日の「志那惣直納帳」にその記



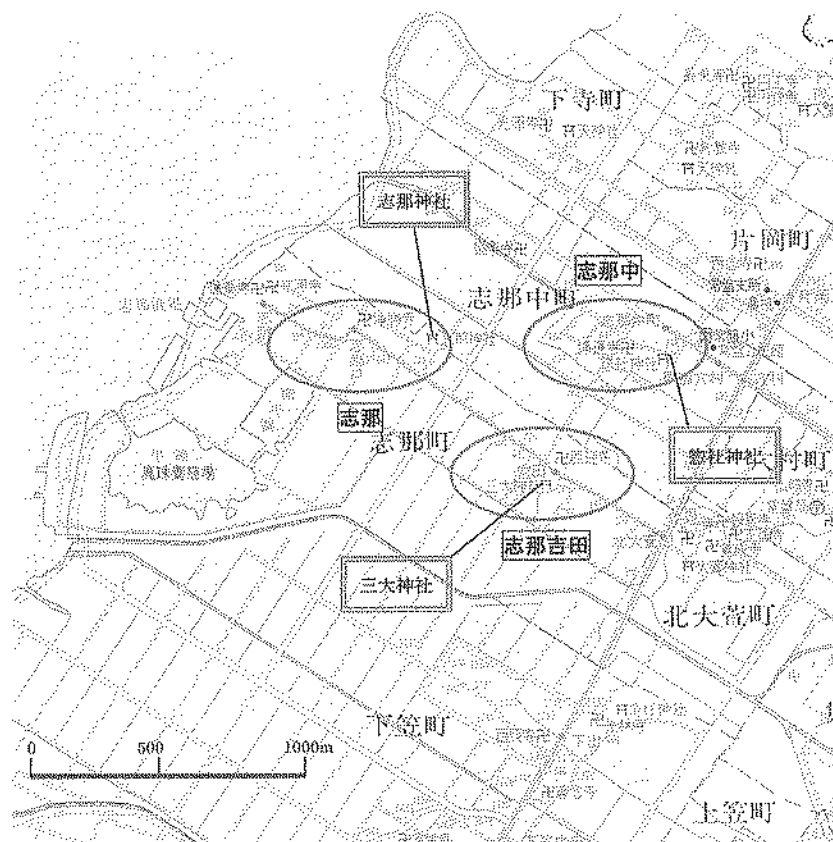


図1 志那地域関係各集落位置図

載が見られるのが史料上の初出といい、天正十年（一五八二）二月八日と翌十一年三月三日とには、それぞれ烏帽子儀や座入り、長（おとな）衆や中者衆など宮座の秩序に関する掟が定められている。また年未詳ながら中世期に記されたと思われる「定志那庄御神事条々事」には、志那荘における祭祀に関する条々が定められており、当時から同荘域が一体となつて祭祀を執り行っていた様子がうかがわれる。<sup>(2)</sup>

志那荘は、近世期にはすでに志那吉田、志那、志那中の三つの村に分かれている。殊に志那村と志那吉田村とは元禄年間に村切りが行われているが、それ以降でも、例えば代官の触書留の廻状などについては、志那吉田・志那・志那中の庄屋年寄が連署している場合が見られる。また祭祀を執り行う区域は近世期を通じて志那荘一円での様態が保持されつづける。特に近世初頭にこの地域の祭祀に取り入れられたと考えられる「さんやれ」の踊りについては、幾つかの文献も残されている。<sup>(22)</sup>

そして、明治維新を迎えた志那の村々では、

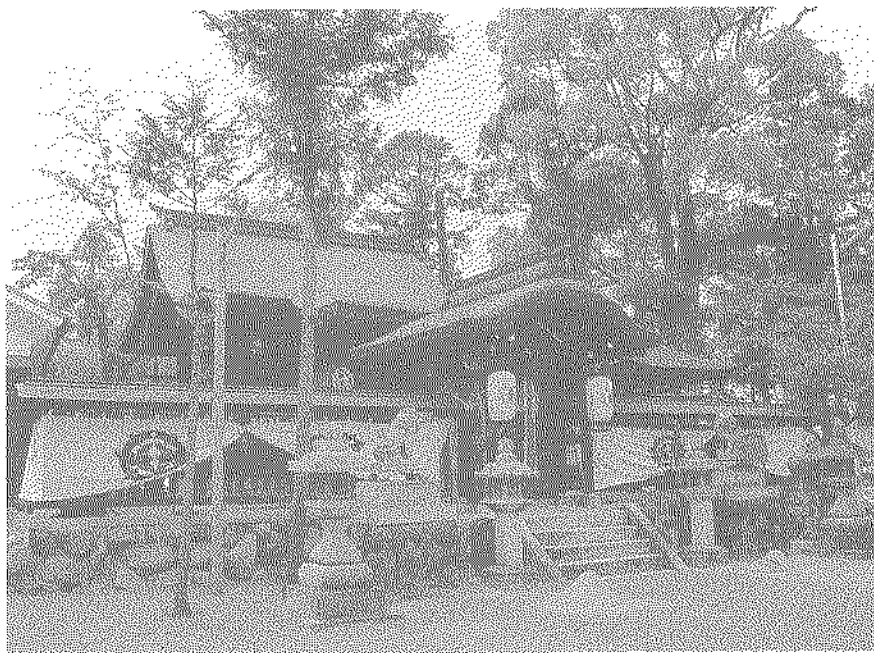


写真1 三大神社本殿

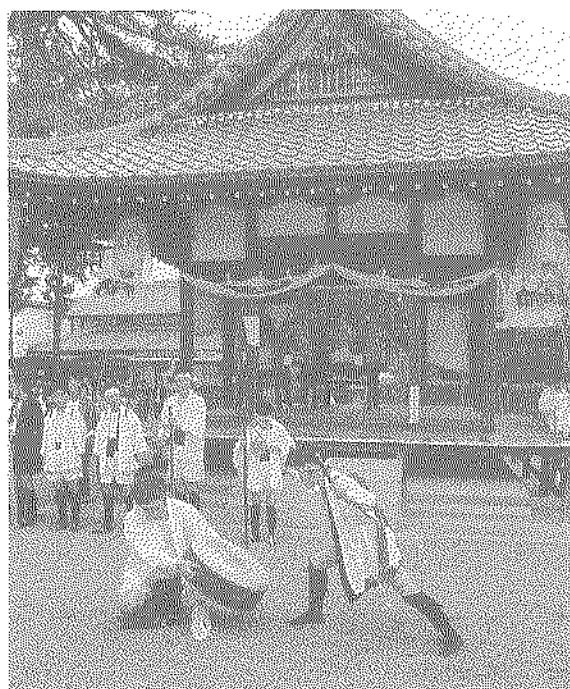


写真2 吉田のサンヤレ

まず村のあり方に相応の変化が起こる。近世後期、志那吉田・志那・志那中の各村にはそれぞれ新田が形成されていたのだが、明治以降それぞれは本村に合一されてゆき、明治七年（一八七四）には、志那吉田と志那、志那吉田新田、志那新田の四集落が志那村となり、同年には志那中村と志那中新田とが志那中村となる。その後、明治二十一年（一八八八）の町村制公布に伴って、翌明治二十二年にこの地域一帯は常盤村として

さらに大きな行政単位の中に組み入れられる。しかしながらこの間に、志那の祭祀には大きな変革がなされている。

まず、明治三年（一八七〇）五月三日の「神事行連書」<sup>(23)</sup>には、以下のような記載がなされ、祭礼の渡御行列についての確認が行われている。

御先発

大神事

次ニ瓢馬

次ニ劔矛

次ニ伝御

次ニ踊

小児

次ニ神輿

御跡発

右之通り相違無御座候以上

年々番ニ面可渡申候

四正

壱本大宮付

末社ニ三人ツ、

大杉ヲ差シ太刀持

三組一社ニ一組ツ、

一社ニ一組ツ、

三社

宮座

そしてその翌年の明治四年（一八七二）には、吉田村と志那中村、そして志那村の志那三カ村が連名で記した「三郷立会御神事式書」<sup>(24)</sup>が出される。同史料には、その冒頭に「大宮大権現

吉田村 若宮大明神 品中村 白山神社 志那村」と記され、以下祭礼の次第について事細かな定め書きが続く。特にこの史料には、吉田村と志那村と志那中村の三村がそれぞれに交わす挨拶や社参、そして踊りの順と位置についてが詳細に取り決められている点が特徴的である。

この「三郷立会御神事式書」の位置付けについて筆者は、惣の祭りとしての志那の祭礼が、急速な近代化によって次第にその原形を留めることが困難になりつつあり、それ故に旧来の慣例を三村が確認する必要性に迫られた結果ではないかと思える。実際、この祭礼の執行をめぐって混乱のあったことをうかがわせる、明治五年（一八七二）四月八日の次のような史料も見られる。

恐れ乍ら願ひ奉る口上書

栗太郡第七区

志那村

吉田村

志那中村

右三ヶ村例年立ち会ひ御神祭一件入継仕り候ニ付き、兼ねて御諒知之通り昨年御神事前二当御序社寺御掛山田耕作様御出張成し下せられ、則ち右神式規定御取り換え成し下せられ御蔭ヲ以て御神事相務め有り難く存じ奉り候、然ル処

当年御神事既ニ明日ニ近寄り甚だ御願い渡し□相成り恐れ入り奉り候得共、実ハ御繁用御中御手数数相懸ケ候儀恐れ入り右願い渡し相成り候得共、自然御當日混雑筋出来御神事差し仕え相成り候てハ恐れ入り奉り候間、誠ニ臨時御願い申し上げ兼ね候得共、明九日御神事ニ付き御出役御差し向い成し下せられ度き段今般御難惣不配右願い上げ奉り候間、何卒前件御賢察成しせられ、右願之儀御聞き届ケ成し下せられ候ハハ有り難き仕合せに存奉り候、已上

明治五年壬申四月八日

志那村

年寄 善五郎 印

庄屋 久兵衛 印

志那中対

年寄 良助 印

庄屋 安次郎 印

吉田村

年寄 新右衛門 印

庄屋 藤太郎 印

戸長 駒井源美

滋賀県御庁

(ツケ紙) 願い之趣聞き届け取り締まり出役之者差出し

候事

(付箋) 本印形之義念候間、追て御用之節調印仕り候間、恐れ乍ら此の段下紙ヲ以て御断わり申し上げ奉り候

この史料は志那の祭礼への官員派遣を滋賀県庁に要請するものであるが、祭礼期日を直前に控え、緊迫した様相がうかがえる。こうした厳しい様相の背景には、当時明治政府が推し進めていた「國家の宗祀」としての神社の在り方の確立を模索する動きの影響があるものと推察される。

例えばこの年の正月には、神祇省布達第一号として村社取調の布達が出されており、これを受けて滋賀県庁は次のような文書を通達している。<sup>(25)</sup>

#### 第二百三十五号

郷社村社氏子調等ノ儀ニ就テハ去ル辛未年中為心得及布達置候次第モ有之候処此度郷社村社子戸数等取調郷社決定可致条別紙定則之通り相心得難形ニ照準シ郷社ノ見込等一區限リ総戸長ニテ取調来ル二十日限り可申出候事

右管内滋賀郡栗太郡甲賀郡野洲郡蒲生郡神崎郡村長戸長副戸長并區総戸長副総戸長へ無洩至急相達スル者也

明治六年三月五日滋賀縣令松田道之

またこの頃には、神社調べと相前後して土俗的な祭祀儀礼が「蛮風」とみなされ、全国でこれが矯正する対象とされてきた。滋賀県においても、明治五年（一八七二）には卜占の禁止や地藏祭（地藏盆）の禁止などが通達されている。志那の祭祀に三村の人々が官員の派遣を求めた史料の当時は、神社取調と特殊儀礼矯正の風潮が蔓延した時代であつたともいえる。ただこの時点では、吉田村の三大神社が「大宮」に位置付けられており、これを中心に祭祀を展開することについて、三村が協力していた様子が見て取れる。

しかし、志那と志那中それぞれの宮が明治九年（一八七六）に三大神社と同等に村社と位置付けられるに及んで、三村合一の祭祀の体制は崩れる。その後は、祭祀や踊りも現在の状態のように三つの集落がそれぞれに各宮で行うこととなったようである。この事態に対して吉田の側は、三大神社の郷社への昇格を目指し、他の二社に対する三大神社の優位性を明確にするこゝとで、旧来の祭祀圏の維持を図る。吉田村によるこの嘆願は、神社合祀政策が本格展開される明治末の直前におこなわれている。やや長くなるが、興味深い史料であると思われるため、以下に全文を掲げる。

#### 社号改称願

滋賀県近江国栗太郡常磐（盤）村大字志那字吉田伊吹里鎮座

#### 村社 三大神社

当社八人皇三十八代天智天皇御宇四年右大臣金連勅ヲ奉シテ近江ノ科戸浦ニ風神級長津彦・級長津姫ノ二神ノ斎祀ナリシ、所謂延喜式内栗太郡八座中ニ列スル意布岐神社ニ御座候、然ル処此地中古浮屠氏跋扈ノ世ニ当リ叡山延暦寺ノ所領ニ属セシカバ、該僧徒等私ニ我意布伎神社ニ配祀ノ神一座ヲ加ヘテ彼山門ノ守護神タル三台権現ニ擬シ、之ヲ三大権現又ハ三大神権現ト私称セシ以來屋移リ物換ルニ從ヒ因襲ノ久シキ遂ニ意布岐神社ノ称号ヲ唱ヘサルニ至リシ所以ニテ、維新ノ当初神仏号ノ區別判明ナリシ際神社号ニ改メシモ猶三大神ノ私称ニ因循シ来リタル次第ニ御座候、抑モ我三大神社ハ志那莊ノ宗社ニシテ古来大宮ト尊称シ、全莊孝テ敬虔尊崇セン神社タルコトハ其華表ノ銘ニ徴スルモ明カナリ、凡ソ志那莊ニ三村落アリテ各斎鎮スル所ノ神社アリト雖トモ他ハ是我三大神社ノ末社ニ属セリ、是故ニ古來奉行セシ所ノ志那全莊ノ大祭ハ即チ当社ノ例祭ニシテ、他ノ村落モ其所祭スル各神社ノ神輿ヲ奉シテ本宮タル我三大神社ノ社頭ニ参列シ、以テ報本反始ノ盛儀ヲ表セシ所ノ

古式ノ祭典ニシテ当社奉仕ノ神職専ラ此祭儀ヲ執行セシナリ、而シテ他ノ神社ニハ古來曾テ神職ヲ置カサリシ等嚴然トシテ本宮ト末社トノ分限ヲ事実ノ上ニ証明セラレツツアリシ次第ニ御座候、夫レ延喜式神名帳ニ所載ノ栗太郡意布伎神社ハ我志那莊ニ鎮座セラル、コト興福寺官務牒、神社啓蒙園花、万葉記等歴々徴證アリテ今更喋々ノ弁ヲ俟タサル所ナリ、然ラハ即チ志那全莊ノ宗社即チ本宮タル我三大神社ノ純然タル意布岐タルコトハ正確明瞭ニシテ、素ヨリ勉ノ末社ノ如キト同一ニ論スヘキ神社ニアサルナリ、然ルニ明治九年神社制度改正ニ際リ古來我三大神社ノ末社タリシ他ノ神社モ皆一樣ニ村社ニ制定セラレシヲ以テ、漸次特立ノ姿ニ變シ今ヤ全ク本宮末社ノ分限ヲ失ヒ、遂ニ古式ノ大祭モ廃絶シ古來ノ由緒ヲモ没却セラレシハ誠ニ神明ニ對シ奉リ恐懼措ク能ハズ日夜慨歎罷在候義ニ御座候、依之中古以來仏徒ノ私稱ニ係ル三大神ノ稱号ヲ全廢シ今回意布伎神社ト改稱シ、以テ古來志那莊ノ宗社即チ本宮タリシ由緒ノ明カニスルハ所謂彝倫ノ標準タル神社ノ本義ニ相副ヒ候儀ト確信仕候、仰キ冀クハ社号改稱義御聽許アランコトヲ、爰ニ御由緒調査書ヲ添付シ此段奉願候也

明治三十六年十二月日

栗太郡常磐（磐）村大字志那字吉田

滋賀県知事鈴木定直殿

村社神社社掌 駒井遵盛

氏子總代 白井治三郎

吉田惣左衛門

宇野松之助

この史料に込められた主要な内容は、現在用いられている三大神社の社号が延暦寺の衆徒によって不当に宛てられたものであることと、本来の呼称は延喜式にもその名が記載される意布伎神社であること、そして三大神社が志那莊全体の惣社であることの三点である。こうした史料がしたためられた背景には、明治十二年に様式の定められた神社明細帳等の神社取調の方途を多分に意識し、これに合致する形で上申書を作成するという知識を、民衆側が獲得したことを意味するものであろう。つまりところそれは、民衆の側が神社という要因を通じて國家の意思を感知し、これを利用する術を覚えたということになるものと筆者は考える。しかし志那の事例では、神社は統合される方向へは進まず、三社が分立する形に帰着することとなった。

先にも述べたように、現在志那吉田と志那、そして志那中の各集落は、それぞれに宮を祀って祭祀を舉行している。ただ吉田の人々の間には、三大神社がこの付近一帯の中心社であった



写真3 「大宮」の文字が染められた法被を着る吉田の若者達

との伝承は今も色濃く伝えられており、三つの集落で行われていた頃の祭礼の様子が今も語られるほか、若衆たちが着る法被の背に現在も記されている「大宮」の文字に、その心意気を見ることが出来る。

以上、明治維新直後から明治末期に神社合祀が強力に推進された時代までの神社祭祀の様子を、草津市志那の例をもとにみてきた。では次に、この事例によって示される「統合される民衆」の様相とその意識について、節を改めて検証してみたいと思う。

#### 四 考察―氏子圏・祭祀圏に対する民衆側のイメージ―

ここで、設定した課題に取り組むにあたって、明治期の神社への諸政策について、本論における要点をまとめておくと、まず、明治維新から明治末期の神社合祀政策に至るまでの政策の流れは、一連のものとして捉えるべきという事が挙げられる。

これまでの神社整理に関する研究は、特に実際の事例・事件を題材にしてこれが行われる場合、当該事象のみを追求しこれを分析する方法が多く見られた。しかし、幾人かの研究者も指

適する通り、明治初頭の神社施策と合祀推進施策とは原因と結果の關係にあり、神社合祀が積極的に行われる時期の在地の状況を検証するためには、対象地域の明治維新直後の様子にも目を向ける必要があると筆者は考える。

そして、しかしながら明治末の神社合祀隆盛期の動向は、日清日露の兩戦争を経験した後の事象という点で、以前とはその様相が異なるという認識も必要だという事も示しておきたい。

これは一見矛盾した考察に思われようが、喜多村理子や桜井治男らが指摘するように、戦費の拡大による財政の逼迫という現実的な要素が、官吏をして、神社整理の推進によっていわゆる「鎮守の森」を山林資源として財産区化するという目論見に至らしめたこと、そして、「大字間の旧態依然とした確執を取り除き、一行政町村としてまとまり、団結して国益を増す一途としていくためには、大字で別々に祀っている神社を一箇所に集め、神社の設備・体裁を整え、神職を常に置き、祭典が正しく斎行される必要があった。そうした神社においてこそ崇敬の念も高まり、経済的にも永続性が保証される」といった思考が、「戦争に勝利する」という國家的課題の出現によってより明瞭に示された点は重要であろう。

では、氏神様の祭礼が「國家ノ宗祀」と位置付けられ、村の鎮守が村社や郷社などと分類された人々の側は、こうした事象

とどのように向き合ったのであろうか。志那の事例に見られた中で、明治三十六年（一九〇三）に「社号改称願」を出した志那吉田の立場から検証してみよう。

志那吉田の人々は、自らの氏神である三大神社を中心に、旧志那荘の祭祀を復活させることを目論んで同史料を作成した。そこで用いられたテクニクは、まず「延喜式内栗太郡八座中ニ列スル意布岐神社ニ御座候」と、その由緒を遡及させ、自分達の鎮守を国との關係の中でより古いものと掘り下げてみせることであった。そしてまた、「即チ志那全荘ノ宗社」との位置付けを示して、周辺三集落における三大神社の祭祀上の優位性を述べることもあった。同史料の主旨は三大神社の社号改称による仏教権力支配の否定にあったが、真のねらいはここにあったと筆者は見る。

志那吉田による「社号改称願」の内容は、「國家ノ宗祀」として提示された神社像に沿うようしたためられており、その意味において同史料は、自身の村落祭祀を國家の宗教観とコネクトさせる作用を及ぼしたものと推察される。これを近代化と呼んで良いのであれば、正に志那吉田の人々は、近代の枠組みの中で自身の物語たる「民俗」を構築しつつあったことになるだろう。しかし、これが導き出されるに至る過程には、「三郷立会御神事式書」などの詳細な祭祀執行手順に関する史料が著さ



れ、関係諸村によって前近代の祭祀儀礼に関する確認作業が行われている点に注目する必要がある。

この「三郷立会御神事式書」が記された五年後の明治九年（一八七六）に志那と志那中の二集落が三大神社の祭祀圏から離脱していることを考えると、「三郷立会御神事式書」の位置付けは単なる手願書としてではなく、志那・志那中・志那吉田による祭祀維持が危機的な状況にあったことの裏返しとも受け取れるのではないだろうか。

祭祀において争論の対象となるものは、神意の帰属などよりもむしろ、祭祀執行における実際面がその争点となる場合が比較的多く見られる。これは現行の民俗事例においても同様であって、祭祀にかかる費用や夫役の徴発が、どの程度の氏子範囲に、一戸もしくは一人あたりどの程度の経費を要して行われるのか、各戸各人に直接降りかかる負担の大小こそが問題とされるのであり、これが多くの集落が関係する祭祀においては、その集積が集落間の対立として顕在化する。

しかしながら、「祭祀の挙行」という目的の前には、こうした実際の利害関係は背景化される場合も多く見られる。その時に人々の前面に据え置かれ、緊迫した事態を回避させる説明原理として用いられるのが「神」である。

「社号改称願」の中で志那吉田側は、鎮守の三大神社を延喜

式内社の「意布岐神社」と位置付けた訳だが、この認識は現在も伝承として吉田の人々に語りとして受け継がれている。しかしながら興味深いことに、志那中の惣社神社も志那の志那神社もまた、式内意布岐神社の裔であるとの伝承が地元によって語られる場合があるのだ。志那と志那中の側に三集落の祭祀の統合という意図が資料的には見られないことから、これは志那吉田の動きに対抗するために構築された説明体系の産物かとも推察されるのだが、いずれにしてもここで登場する「意布岐神社」は、自説を補強するための手段としての位置しか与えられていないとも言えよう。

最終的に、志那の集落は神社を合祀させる方向には進まず、その状態は現在に至るまで続くこととなる。これに関して、神社合祀政策展開への積極性という点から見れば、当時の滋賀県の取組みは、三重県などのそれに比して消極的であったという背景はあるだろう。しかしながら、明治維新から神道国教化の諸政策の布達、神社取調べの執行、そして合祀推進という「国家ノ宗祀」としての神社の在り方が模索されてゆく中であって、志那の人々は着実に近代化の中にその身を曝し、祭祀に対する解釈を改変させてきたことは間違いない。ただ、その結果構築されたものは、当初官の側によって意図されたであろう国民としての統合の姿ではなかった。

明治維新以降、志那の人々は自身の手で祭祀の対象となる地域を再編成していった。それは祭祀に携わる実際の負担体系の問題等があったことは想像されるが、神社に「国家ノ祭祀」という性格が与えられた中で、自分達が祭祀を執り行う範囲（氏子圏もしくは祭祀圏）を自身でイメージする必要に迫られ、これを為してみせたという点において画期であったものと筆者は考える。その意味において志那における「近代」の到来は、現在我々が民俗として見聞するムラに至る、祭祀を通じた共同体自我の確立に寄与したと言えるのではないだろうか。

## おわりに

従来、神社で執り行われる祭祀に関して、特にムラの氏神様を中心に人々が寄り集まる事例については、これを民俗的な存在であると認識する傾向は比較的強かったように思われる。それは、敗戦後の日本が国家神道の解釈を好まず、神社の祭祀を、明治の近代化の影響に左右されない、古来連綿と続いたものとして位置付けておきたいとする志向が強かったからかもしれない。宮田登は「近世以来の神社の祭り、とくに各地の村氏神に連なる神社には厳粛な祭りが現在も伝承されている。それはいはゆる国家神道とは無縁の信仰に支えられているという認識に他

ならない」として、地域社会が村の氏神と国家的な総社の二種類の神社を抱える二重構造にあったことを指摘する。そして宮田は、国家神道の浸透が神社祭祀の表層にとどまり、神道国教化が失敗したことも全て「現実の各地の氏神社の祭祀の伝統にそうていえば自然の道理」と説く<sup>33)</sup>。

神社合祀に関する歴史上の位置付けについて安丸良夫は「神仏分離以下の諸政策は、国民的規模での意識統合の試みとしては、企図の壮大さに比して、内容的にはお粗末で独善的、結果は失敗だった」と斬りながらも、「国体神学の信奉者たちとこれらの諸政策とは、国家的課題にあわせて人々の意識を編成替えするという課題を、否応ない強烈さで人々の眼前に提示してみせた」とも述べる。そして人々が神社合祀という「暴力的再編成」への抵抗を試みる場合には、そこに提示された国家的課題をより内面化して、しかも主体的に取り扱う必要が生じてくるとの見解を示している<sup>34)</sup>。

神社合祀の推進には、これに先駆けて行われた神社取調が基本台帳となったものと想定されるのだが、官吏が神社の全てを調べるとしても、それは地元からの申告をある程度汲み上げる形でしか成し得なかったのではあるまいか。そして地元は、「国家」から問われて初めて自分達が祀ってきた神社の由緒来歴を考え、「国家」の質問の趣旨に沿って祭祀の及ぶ範囲をイメー

ジしたかもしれない。そうして導き出された神社の報告は、その後の鎮守をめぐる情勢に大きな影響を与えたであろうし、またそこで新たな民俗が「復古」の名のもとに創生された可能性は高いものと筆者は推察する。

宮田が述べるように、近世以来の古態を留める祭祀が、国家神道との二重構造の中で近代を生き延び、戦後純粋な民俗信仰として復活したとする解釈については、その全てが否定されるものではないと思われる。しかしながら、神社やこれを祀る人々が近代化されてゆく過程で、その説明体系を国家神道に求め、あるいはより古い歴史や神話に依拠させたことは事実であり、そうした「近代化」によって獲得された物語が、伝承と呼ばれるに至っているであろうことは、常に想定しておかねばならないだろう。

本論では、事例として取り上げた対象が志那の三集落のみであり、こうした課題を検証してゆくためには、更に多くの対象を調査してゆく必要はあるものと思われる。現状で筆者は、民俗の成立の全てが必ずしも近代化によってのみ喚起されたとは考えていない。ただ、今時点で採取し得る民俗に対する近代化の影響については、決して過小評価すべきではないことを指摘して、本論の締めくくりとしたい。

#### 〔註〕

- (1) 岩竹美加子編訳『民俗学の政治性―アメリカ民俗学一〇〇年目の省察から―』一九九六年、未來社、一一一ページ。
- (2) 岩竹「一九九六」前掲、三二一ページ。
- (3) 米地実『村落祭祀と国家統制』一九七七年、お茶の水書房、七六ページ。
- (4) これに関して島村恭則は、従来の民俗学が「近代そのものあり方を民俗学的に問うという作業ではなく、それまで変化することなく伝承されてきた「民俗」が「近代化」によってどのように変化したかというように、「近代化」の影響論としてとらえる傾向が長く続いていた」と指摘している（島村恭則「近代」『新しい民俗学へ―野の学問のためのレッスン26―』二〇〇二年、せりか書房、一一三ページ）。
- (5) 安丸良夫『神々の明治維新』一九七九年、岩波書店、一〇六―一〇七ページ。
- (6) 例えば田中秀和は、明治初期の神仏分離の評価について、これを「氏神・氏仏の廃滅を通じて日本人の精神史に大変革をもたらしたという安丸良夫氏の指摘が定説となっている」と述べる（田中秀和「明治初期の神仏分離と地域社会―青森県津軽地方と秋田県を中心に―」『明治維新史研究四 明治維新の地域と民衆』一九九六年、吉川弘文館）。
- (7) 『法規分類大全』二六寺社門（一九七九年 原書房）、七八―八二ページ参照。
- (8) 『法規分類大全』二六寺社門（一九七九年 原書房）、八七―九三ページ参照。
- (9) 『法規分類大全』二六寺社門（一九七九年 原書房）、九五―九六ページ参照。

- (10) 『法規分類大全』二六寺社門（一九七九年 原書房）、九六―一九ページ参照。
- (11) 大濱徹也「総論―『国家神道』をめぐる虚実―」『講座・神道第三巻 近代の神道と民俗社会』一九九一年、桜楓社、八ページ。
- (12) 『法規分類大全』二六寺社門（一九七九年 原書房）、一七五―一八一ページ参照。
- (13) 森岡清美『近代の集落神社と国家統制―明治末期の神社整理―』一九八七年、吉川弘文館、三三二ページ。
- (14) 喜多村理子『神社合祀とムラ社会』一九九九年、岩田書院、一六―一七ページ。
- (15) 三重県『三重県史 別編―統計―』一九八九年、五二四―五二五ページ。
- (16) 鹿野政直『日本近代化の思想』一九八六年、講談社、一一七ページ。
- (17) 安丸『一九七九』前掲、一四三ページ。
- (18) 安丸『一九七九』前掲、一六六―一六七ページ。
- (19) 山路興造『芸能伝承』『日本民俗学』一九八四年、弘文堂、一八七―一八九ページ。
- (20) これに関して『国選択無形民俗文化財調査報告書 草津のサンヤレ踊り調査報告書』本編（二〇〇三年、草津市教育委員会）は、サンヤレの踊について「中世後期に登場する雛子物という祭礼芸能にもっとも近い形態を今に伝える民俗芸能と位置づけることができるのである。中世の時代からこの地に伝承されてきたものは断定できないが、一七世紀後半に京都で流行した芸能が流入し、近世農村の祭礼芸能として伝承され、現在に伝えられてきたことはほぼ想定できる」との見解を示している。
- (21) 『草津市史』第七巻北部地域編所収史料。
- (22) 『国選択無形民俗文化財調査報告書 草津のサンヤレ踊り調査報告書』本編 所収史料等を参照のこと。
- (23) 吉田包治家文書
- (24) 『国選択無形民俗文化財調査報告書 草津のサンヤレ踊り調査報告書』本編 所収史料。
- (25) 『草津市史』第七巻北部地域編所収史料。
- (26) 滋賀県所蔵文書。
- (27) 『草津市史』第七巻北部地域編所収史料。
- (28) 桜井治男『蘇るムラの神々』一九九二年、大明堂、五五ページ。
- (29) これに関連して上野誠は、説明装置としての「神」の位置に言及し、「（神）という説明装置にすべてゲタをあずけることによって、われわれはしばしばフィールドにおいて思考停止していかないかということをもたず疑う必要があるだろう」との見解を述べている（上野誠『芸能伝承の民俗誌的研究―カタとココロを伝えるくふう―』二〇〇一年、世界思想社）。
- (30) 宮田登『国家神道』『近代日本文化論九 宗教と生活』一九九九年、岩波書店、五三―五四ページ。
- (31) 安丸『一九七九』前掲、二二〇―二二二ページ。